中学校２年生　ESD道徳　学習指導案

奈良教育大学附属中学校　有馬一彦

1、単元名「サリュート～あるオリンピアンの選択～」　希望と勇気，努力と強い意志

2、単元の目標

○ローカルな価値感とグローバルな価値感の関係や違いについて考える。　（思考力・判断力・表現力等）

○社会の価値感と自分の価値感が違うとき、自分はどんな選択ができるかについて考えることができる。（思考力・判断力・表現力等）

○社会の持つ価値感は、個人や地域、年代などによって異なり、変化することを知る。（知識及び技能）

○社会の価値感と自分の価値感が違るとき、どう受け止め、どう決断するべきか考える経験をする。（主体的に学習に取り組む態度）

3、単元について

（1）教材観

本単元はESD道徳として授業展開を考えている。本教材に扱う人権の平等という概念は、当時の黒人の人権問題の社会的認識と現在とでは違ったものになっている。現在から歴史を振り返れば、許されないであろう出来事も、当時の社会概念や人権意識の中では認められていたことも少なくない。時代の変化と共に、価値感は変化していくのがあたりまえではあるが、その時代に自分の強い意志で立ち向かい、時代を積極的に変化させようとした先人がいることを忘れてはならない。ESD道徳では、道徳に求められる価値感の涵養よりもさらにグローバルかつ世代間にも通用する広くて深い価値感を身につけさせたいと考えている。

この出来事では、黒人差別に断固ととして抗議の意志を表明した二人の黒人選手の行動ではなく、一緒に表彰台に上ることになった一人の白人選手の思考や行動、その後の人生について注目した。黒人選手と共に行動する義務も責任も無く、手を伸ばせば栄光に手が届く瞬間に、自分の信念で行動したピーター・ノーマンに着目することで、生徒達に既存の価値感と向き合う勇気と価値について考えさせられる教材と考えた。

（2）生徒観

本校中学一年生は、比較的周りを見て行動できる生徒が多い。逆を返せば周りの目を気にしているや周りに同調するといったバランスを見た行動が多いとも言える。現時代においても、「雰囲気を読む」や「空気」といった同調性圧力が高まっているのが現状である。周りの空気を壊してでも、自分の主張ができる生徒は、あまりいないのが現状である。そのような生徒に対して、多くを失っても人権を守ることを選んだピーター・ノーマンの選択に触れることは、これからの人生において多くの示唆があると考える。

（3）指導観

本指導では、その時代の背景をきちんと伝えることで、生徒自身もその時代に生きている仮定ができるようにしたい。そのために当時の写真を提示しイメージを膨らませる。授業のポイントは、表彰式前の黒人選手とピーター・ノーマンとの会話のシーンになる。生徒にはピーター・ノーマンの立場で、その場を疑似体験をさせ、自分ならどう行動するだろうかと考えさせることで、心の中に起きるさまざまな計算や葛藤を感じさせたい。自分の思う真実と社会の求める行動とのギャップを比較し、自分の行動を決めなければならない。自分の信念を貫くことで、失うものが多すぎる。そんなとき、人はどう行動すべきなのだろうか？本指導では、ピーター・ノーマンのように行動すること推奨しているわけではない。ただ、自分の信念で行動する勇気と希望を知ってもらいたいと考える。

（4）ESDとの関連

・本学習で働かせるESDの視点（見方・考え方）

相互性…人権を守ることは大切だと誰もがわかってはいるが、実際に自分が行動するときは自分にも被害やマイナスのことが起こりえることに気付き、それでも互いに協力し合うことで人権が守られる世界の実現に近づく。

公平性…人権の保障がどの社会でも、どの時代でも守られるために、何が必要なのかについて考える。

連携性…自分の身近な社会だけでは無く、広く世界を見たり、互いが理解し合い行動することで世界が変えられることに気付く。

・本学習を通して育てたいESDの資質・能力
広く時代や社会を見通すことのできる能力
自分の身の回りから、世界的な規模まで広く社会の問題を見抜く力を付ける。また、社会を変えようとする勇気や行動について知り、その価値に気づく。
つながりを尊重する態度
一人の行動が社会に対して少なからず影響できることを自覚できる。

・本学習で変容を促すESDの価値感
世代内の公正
どの時代でも等しく人権が守られる社会の実現に対して、私たちも責任を負っていることに気づく。
人権・文化を尊重する
人の尊厳は何よりも増して大切にされるべきで有り､何人にも犯されることは許されないことを心に刻む。

・達成が期待されるSDGS
10　世界中から不平等を減らそう
10－2　2030年までに、年齢、性別、障がい、人種、民族、生まれ、宗教、経済状態などにかかわらず、すべての人が、能力を高め、社会的、経済的、政治的に取り残されないようにすすめる。
10－3　差別的な法律、政策やならわしをなくし、適切な法律や政策、行動をすすめることなどによって、人びとが平等な機会（チャンス）をもてるようにし、人びとが得る結果（たとえば所得など）についての格差を減らす。
3　すべての人に健康と福祉を
1　貧困をなくそう

4、単元の評価基準

㈠知識及び技能	㈡思考力・判断力・表現力等	㈢主体的に学習に取り組む態度
○社会の持つ価値感は、個人や地域、年代などによって異なり、変化することを知る。	○ローカルな価値感とグローバルな価値感の関係や違いについて考える。 ○社会の価値感と自分の価値感が違うとき、自分はどんな選択ができるかについて考えることができる。	○社会の価値感と自分の価値感が違るとき、どう受け止め、どう決断するべきか考える経験をする。

5、学習指導案

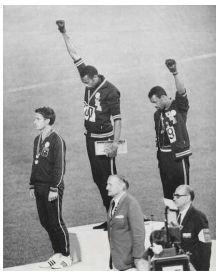
知る

発問①「ブラック・パワー・サリュート」という言葉を知っていますか？

「知らない」・・・・・・・・・・まずは次の資料を一緒に読んでみましょう。

「Black Lives Matter」は知ってる・・・アメリカの黒人差別に対する反対運動のことだよね。

発問②メキシコオリンピックの200m走の表彰式でのできごとです。資料①



・当時アメリカで起こっていた黒人差別撤廃運動（公民権運動）。
・その象徴とされるキング牧師が暗殺された。
・アメリカの代表として黒人選手がオリンピックに出場すべきではないという声。
・しかし、トミー・スミスとジョン・カーロスは出場を決める。
・黒人選手達は、「人権を求めるオリンピックプロジェクト」のバッジを大会期間中に身につけ、人種差別に対して抗議の意志を示していました。
・オリンピックでは、政治的ないかなる主義主張も認めない方針であったため、彼らの行動は大会関係者からは非難をされていました。
・大会の結果は、トミーが1位、3位にジョンが入った。
・2位はオーストラリアのピーター・ノーマン。オリンピック記録を上回る好タイムでの2位は、賞賛される結果であった。
・彼の国も、原住民のアボリジニ隔離やアジア人差別をするなどの白人至上主義の国であった。
・トミーとジョンは、表彰台に上ったとき、黒人の権利を主張するポーズである拳を突き上げるポーズ（ブラック・パワー・サリュート）をするつもりであることをノーマンに話す。

深める

発問③あなたがピーター・ノーマンの立場なら、どうしますか？

A一緒にサリュートをする

・人権を守る行動ができる。
・大会のルールに違反することに
・下手するとメダル剥奪も、、
・母国の国民からは非難されるか

B何もしない

・大会関係者からは攻められない。
・自分のメダリストの立場は守ることができる。

Cサリュートやめてもらう

・大会関係者からは攻められない。
・彼らの主張は、できない。
・スムーズに式が終えられる。

《予想される発言》　A：自分のメダルを失っても、人権運動に加担できるか？
B：ルールは守っている。非難される行動ではない。
C：大会のルールを守ってもらう。問題なく表彰式が終えられる。

答え：ピーター・ノーマンはバッジを付けて式に出る。Aに近い行動を取る。

発問④：ピーター・ノーマンはその後、どうなっただろう。

Aその勇気ある行動が称えられる。

Bその行動がとがめられる。

《予想される発言》Ａ：黒人差別に勇気を持って反対したことが、評価される。
Ｂ：オリンピックのルールを破り、黒人の見方をしたことを非難される。

広げる

答え：ピーター・ノーマンは国民やマスコミから非難の的となり、メダルは全く評価されなかった。4年後のオリンピックも標準記録を突破したのにもかかわらず、選手として選ばれなかった。

発問：ノーマンの行動は母国では、非難された。それでも、彼の行動は正しかったのだろうか？自分のコミュニティの基準に逆らってでも、自分の判断を通すことができるだろうか？

Ａ：自分の判断を信じてできる。

Ｂ：母国の基準に従ってしまう。

《その後のピーター・ノーマンについて》
1970年頃になると、黒人の人権についての理解がアメリカで広まり、徐々にトミーとジョンの行動に対して「人権差別と戦った英雄」としての理解が広まっていく。しかし、ピーターの栄誉は回復されなかった。甥のマットは、「なぜ、サリュートに同調したのか」尋ねるとピーターは「見て見ぬふりをすることができなかった。そうしてしまうと、彼らを差別する人たちと同じになってしまう。肌の色なんて関係ない。そして、人間はみんな平等だと言った。」マットは、後悔していないかたずねる。しかし、ピーターはしていないと強く言った。「たしかに得るはずだった多くを失ってしまったかもしれないが、心は満たされている。自分の信念を貫き通せた。」と答えた。

発問：人間の持つ価値感は、時代の流れや場所によって変化する。今は当たり前のことでも、何年か後には変化しているかもしれない。時代の変化と共に変わっていった価値感を他に知っていますか？

発問：自分の価値観と周りの人の価値観が違ったとき、果たして自分の価値観で判断し、行動することはできるだろうか？
自分の価値観とは、違った価値観と出会ったとき、自分の価値感を変えることはできるだろうか？

○この授業ではたかせるESDの視点
・多様性・・・ローカルな価値感、グローバルな価値感、個人の価値感、社会の価値感など価値感は人や文化、時代によって異なることを知る。
・公平性・・・自分の信じる価値感と属する社会の価値感が違うとき、どうすれば良いのか。当事者として考える機会を設ける。

○この学習を通して育てたいESDの資質・能力
・批判的思考（クリティカルシンキング）
信じられている価値感が絶対ではないという問い。
・多面的・総合的に考える力（システムズ・シンキング）
人権についての正しい理解、歴史的背景。
・未来像を予測して計画を立てる力

自分の行動がどのように周囲に影響を与えるのか。どのようなメッセージを与えるのかを推察する。
・つながりを尊重する態度
ともに戦った仲間に対する共同意識、相手の価値感に共感する態度。

〇達成が期待されるSDGS
・１０　人や国の不平等をなくそう
・３　すべての人に健康と福祉を
・１　貧困をなくそう

資料URL

中学生時に目指す姿

〇持続可能な世界を作るためには、現状の社会システムを変えたり、自分達の価値感や生活様式を変えることも必要となる。クリティカルに物事を見つめたり、自分から社会の変容に関わっていくことで、少しずつ社会が変化し、自分たちが望む世界に近づいていく。

ESD道徳

〇グローバルな道徳心を身につける。
〇未来に対しても通用する道徳心を身につける。
〇自分で考え、自分から行動する力を大切にする。

各教科での学び

〇ＥＳＤ的な視点を持つことで、各教科の学びが、机上で終わること無く、実社会とつながり、価値ある学びとなる。

1・2年合同奈良めぐり

〇奈良をフィールドにＥＳＤ的な価値感で学べるテーマを考える。
〇奈良の地域に貢献できるような学習ができる。

総合的な学習「卒業研究」

〇自分の興味関心のテーマを、より深く探究する。
〇ESD・SDGｓ的な課題解決やテーマを扱う。
〇広く成果を発表し、自ら社会と関わる態度を育成する。

臨海実習・修学旅行

〇地域の歴史や文化を学び、その中でESD的な視点の学びができる。
〇学びのまとめや発表を通して、より深く学ぶことができる。

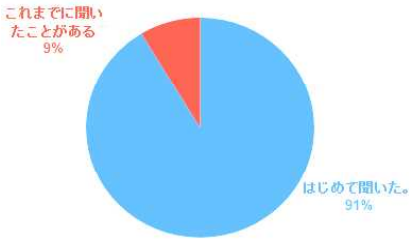
TAKE A STAND

あるオリンピアンの選択

「TAKE A STAND～あるオリンピアンの選択～」の授業はいかがでしたか？
私自身、この学年で授業させてもらうのは初めてで緊張しました。
今回扱った1968年のメキシコオリンピックでの出来事は、実は私も知りませんでした。この件を知る経緯は「Black Lives Matter」(2020年アメリカで黒人男性のジョージ・フロイドさんが白人警官から暴行を受けて死亡した事件に端を発し、世界的に広がった抗議運動)でプロテニス選手の大坂なおみさんが、亡くなった方の名前が書かれたマスクをした写真を見て、「スポーツと政治・人権の関係」が気になって調べだしたこときっかけでした。調べれば調べるほどジョンとカーロスの難しい立場がわかりましたし、ピーターの人生についても考えさせられることが多かったです。このことを学んだからと言ってピーターのような生き方を簡単にはまねできないでしょう。しかし、周囲に流されず自分の信念を持ち力強く生きていくことは、私たちもできるのではないかと考えました。最近は「場の空気を読む」とか「周りの目が気になる」など、大勢の考え方に逆らわずに生きた方が賢い生き方だと言うような風潮が感じられます。そんな中、ピーターのような生き方について知ってもらうことは、中学生のみなさんにとっても価値があると考えました。感想を読むと、みなさんがしっかりと授業を受け止めてくれていたことがわかりました。少し難しいのではないか？という私の心配を良い意味でひっくり返してくれて、とても良い学年だなと思いました。みなさんも人生の中でいつか、ピーターの表彰台のような場所が目の前に現れるかも知れません。その時は、「TAKE A STAND」を少し思い出してくれたらと思います。感想からいくつか紙面にて紹介させていただきます。

奈良教育大学附属中学校　主幹教諭　有馬一彦

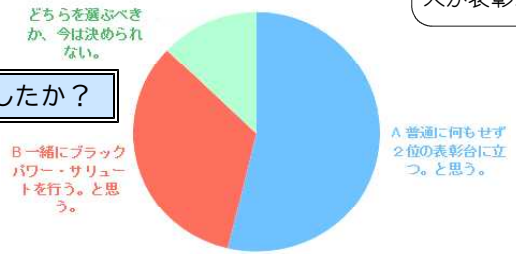
質問1：あなたは、このエピソードについて聞いたことがありましたか？



有：91%の人がはじめて聞いた話ということでした。みんな知ってたらどうしようかと思っていたので良かったです。

有：逆にこの出来事についてもっと他の人にも知ってほしいと思いました。

質問2：表彰式であなたがピーターの立場なら、どうしましたか？



有：Aの選択肢が半分強、やはりピーターの決断はすごいということかな。自分以外にも守るべき家族や親族などもいるでしょうし、大会の規定を守るべきという考え方もあるでしょう。
有：Bの選択肢を選んだ人が30名ほどいました。私の予想よりも多かったです。ピーターの行動に共感した人がこんなにいるということに勇気付けられました。

質問3：ピーターが取った行動について、あなたはどう思いましたか。

こんな時に自分の将来もかえりみず、自分の意志を貫けるのは、自分ではできないからこそすごいと思った。

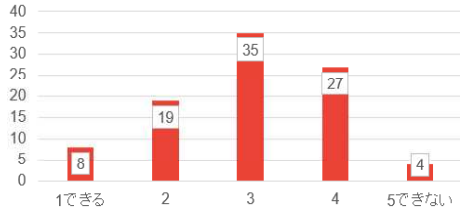
いいことだと思う、このときに、黒人を応援(？)をするなんて、このあとどうなるかわからないのに、バッチを付けて、反抗するなんて、すごいと思ったし、バッチを付けなかったら、普通の人として生きれたと思うし、英雄になれたのに、バッチを付けて講義するのはすごいことだと思った。。

国を背負っているので、自分の判断(見て見ぬ振りをすると、自分も差別することになる)で動くには責任が重すぎると思った。

私は差別をすることはいけない事だと頭ではわかっているけけど、ピーターのように行動に移すことはできないと思う。だから、自分の考えを信じて行動に移せるピーターはすごいと思った。

もし私がピーターだったら、やっぱり怖いし、家族が非難されたり家族が離れたりしていくのは怖いしそんなことしてまで運動をするほど勇気はないと思う。でもピーターがしたことが間違いではないしどっちが正解とかはないと思う。だからこそ、ピーターは今称賛されているのだとも思う。

質問4：自分の価値感(判断)と周りの価値感(判断)が違ったとき、あなたは自分の信じる価値感で行動することができるだろうか？



有：できると答えた人が8名もいます。拍手！
多くの人が真ん中を選んでいるね。悩みますよね。当然。
悩むことが大切だとも言えます。それだけ真剣に考えていると言うことだし、いろんな立場になって考えることは良いこと。

※質問5・6は紙面の都合で飛ばします。

質問7：今回の授業を受けて、あなたが感じたこと、考えたことを自由に書いてください。

私は黒人差別などは良くないと思います。人権が肌の色や人種で差別されたら本当に嫌です。自分は自分の生まれ持った肌の色などを大切にしたいです。今、私は差別はいけないと言っているけれど、もし私が黒人差別がされていた時期にいたら、私はなんて言うのかなと思いました。だけど、やっぱり差別されるのは良くないと思います。まだ、差別が全てなくなったわけではないけど今後そういうのがなくなってほしいなと思っています。

肌の色が違うだけで、なぜここまで差別が生まれてしまうのか、悲しかった。ピーターとスミスとカーロスは、ずっと仲良くしていたということが、意外だったとともに、三人の余生が全く楽しくないものになってしまったわけではなかった、ということが嬉しかった。自分の考えを貫き通したピーターは本当にすごい。この人が表彰式で列の行動をとっていたら、今の世界は全く違うものになっていたのかもしれない。(後略)

ピーターが取った行動はすごいなと思いました。ピータが遅れてたのではなく、時代が遅れていたのだなと思いました。自分の意志を突き通せるのはすごいことだと感じました。

有：感想ありがとうございました。思ったよりもたくさん書いてくれた人が多かったし、真剣に考えてくれていると感じました。これからも人権や平和について考えていってほしいと思いました。

成果と課題について

　今回取り組んだESD道徳「サリュート～あるオリンピアンの選択～」は、黒人細別問題を題材にしたものだ。この黒人の公民権運動は、中学校では社会の歴史分野（中２）で習ったり、英語の教科書ではキング牧師の演説が取り上げられるなど、社会的な背景を理解と言う面では、中学校１年生には少し早かったかも知れない。指導案立案時は中学校２年生を対象にしていたのだが、学校の事情により今回は中学校１年生での実施となった。中学校１年と言うこともあり、細かな社会的背景の学習については行わず、黒人差別が日常的に行われていたこと、それに対する抗議運動が激化していたことについて、当時の写真を使ってビジュアル的に理解させることに努めた。道徳の授業では、自分の所属する集団からより広い世界で通用する道徳的規範について学ぶことが多いように思う。今回のESD道徳では、その規準が自分のから同心円状に広がる二次元的な広がりのみならず、時代の変化と行った時間軸を入れることによって、より高度な道徳となるようにした。ある時代の道徳的な行動が、ある時代では非道徳的であったり、その反対にもなり得る。そのような、時間の枠や文化的背景を超えた道徳について、考えることが今回の目的の１つである。
　主人公のピーター・ノーマンの表彰式での選択と彼のその後の不遇な人生のストーリーを追うことで、生徒にも彼と同じ状況に身を置いたとき、どんな選択をするのかについて考えさせたかった。最近は、短期的な利益追求や周りの目といった自分以外の因子に、若者達は敏感になっているように感じている。そんな彼らにとって、ピーターの行動はどう映るのか？約束された栄光を前にして、すべてをなげうってでも目の前の黒人の無念な気持ちを察し、自分の行動を選択するその信念にふれてもらいたいと考えた。自分の信念を貫くことは、たいへん勇気がいること。そんな勇気を持った行動をとった人がいたことに気づき、未来への希望を持ってもらいたいと考えた。
　振り返りのンケートでも、ピーターの選択の素晴らしさを称えながらも、それを自分と重ねたときの難しさに気付いた生徒もいた。約半数の生徒が、ピーターの行動は理解しながらも、ピーターとは同じ行動を取ることはできないと回答した。それだけその行動の持つ意味は大きく、社会に与える影響も大きいと言うことだろう。それだけに、ピーターの行動の素晴らしさを確認することができ、本実践は道徳教材としてもすぐれていると感じた。
課題としては、より中学生の日常生活に近い事例をあげて、自分事として捉えさせたい。ESDを学ぶだけでは無く、自己変容や行動変容に如何に結びつけるのかについても今後考察したい。２年生や３年生での実践にも挑戦したい。